

国際島嶼教育研究センター研究発表要旨

第 228 回 2023 年 4 月 24 日
奄美群島の宗教文化と神社の関係について
町 泰樹
(鹿児島高専一般教育科)

奄美群島は、琉球にルーツを持つノロ（女性神役）による村落祭祀やユタのシャーマニズムといった在地の宗教文化を有する地域として知られている。こうした在地の宗教文化は、明治期以降、廃仏毀釈や外来宗教の導入によって衰退してきた。ただし、在地の宗教文化と外来宗教との関係は、対立的なものだけではなく融和的なものもある。とりわけ神社は、廃仏毀釈の際には在地の宗教文化を抑圧する存在として立ち現れる一方で、ノロたちの祭場でもあった神社や在地の英雄譚から創建された神社が存在するなど、在地の宗教文化の受け皿としても機能してきた。発表者は、近現代における奄美群島の宗教文化の変容に関心を持ち、出身地である与論島の葬制の変容や、民俗信仰と神社の関係について研究を行ってきた。本発表では、発表者のこれまでの研究を概略的にたどりながら、奄美群島の宗教文化を理解するために神社に着目する意義を確認する。その上で、奄美群島における神社や、その管理を担っている人々の語りから、在地の宗教文化と神社との関係について考えていきたい。



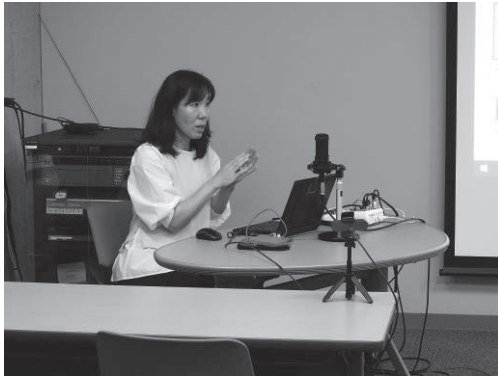
町 泰樹氏

第 229 回 2023 年 5 月 29 日
ザンジバルのダガー産業：内陸国への
タンパク質食料供給としての意義
藤本麻里子
(鹿児島大学水産学部)

タンザニアのインド洋島嶼地域ザンジバルでは、カタクチイワシの漁業と煮干しへの加工産業が盛んです。カタクチイワシをはじめ、小魚全般をスワヒリ語でダガー（dagaa）と呼びます。ダガーはタンザニアの国民食ともいえるほど身近で重要なタンパク源です。本発表ではタンザニア各地のダガー加工産業を紹介し、特にザンジバルにおける煮干し加工産業に焦点を当てます。

ザンジバルはタンザニアの首都都市ダルエスサラームからフェリーで 1 時間半ほどの距離にあります。この離島地域に、内陸のコンゴ民主共和国（以下、D. R. コンゴ）から多くの商人が訪れ、煮干しを大量に買い付けて本国へ送っています。D. R. コンゴでは 90 年代に勃発した内戦とそれに伴う政情不安で、人々の生活インフラは破壊されました。多くの難民が、熱帯雨林の森で野生動物をタンパク質食料として利用せざるを得ない状況が続きました。野生動物は急減し、近年は人々のタンパク源は獣肉から水産物へシフトしています。

発表者はザンジバルにおけるカタクチイワシ漁、仲買加工産業および、コンゴ人商人と産地仲買人の取引慣行などを調査し、そのフードチェーンを明らかにしてきました。また、D. R. コンゴの都市ルブンバシにおける調査から、ザンジバル産ダガーが D. R. コンゴのみならず周辺国にも流通していることがわかりました。本発表では、ザンジバルのダガー産業を紹介し、内陸国へのタンパク質食料供給という観点からその意義を検討します。



藤本麻里子氏

第 230 回 2023 年 6 月 19 日
奄美群島における焼塩土器の基礎的研究
與嶺友紀也
(伊仙町教育委員会)

これまで古代九州の焼塩土器（布目圧痕土器）が奄美群島で出土することは知られていた。焼塩土器が九州からの搬入品の一つとされる一方で、奄美群島の在地土器と焼塩土器の胎土が共通することも指摘されていた。すなわち奄美群島内で焼塩土器を生産しており、奄美群島の焼塩土器は貝塚時代後 2 期後半の社会状況を示す遺物の一つになる可能性がある。

そこで奄美群島出土の焼塩土器の詳細な観察を行い、鹿児島本土の焼塩土器と比較を行った。また奄美群島での焼塩土器の出土事例の集成も実施した。その結果、奄美群島の焼塩土器と鹿児島本土のものは器形と内面の布目痕が共通し、胎土・製作方法・年代観が異なることがわかった。

したがって奄美群島内で焼塩土器が生産・流通していたと推定された。同時に古代九州の製塩技術が奄美群島に伝播した可能性が出てきた。そして奄美群島における焼塩土器の出現・展開の背景には、奄美諸島において 9 世紀後半より本格的な農耕や鍛冶技術を導入したことによる塩の需要の高まりが想定された。製塩場所の候補地としては奄美大島が挙げられ、徳之島や沖永良部島も一部生産に関わっていた可能性がでてきた。そして喜界島は塩の一大消費地であったと考えられた。



與嶺友紀也氏

第 231 回 2023 年 7 月 18 日
一色次郎研究の現在

鈴木優作
(鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島の近現代」教育研究センター)

本発表では、沖永良部島出身の作家・一色次郎（1916-1988）の研究状況について述べる。一色は、「冬の旅」（1949 年）および『孤雁』（1961 年）で二度の直木賞候補となり、1967 年に「青幻記」により第 3 回太宰治賞を受賞し、1973 年に映画化され、海外諸国でも上映された。以後も共編『東京大空襲・戦災誌』（1974 年）で菊池寛賞、『サンゴしょうに飛び出せ』（1975 年）で産経児童出版文化賞を受賞した。以上のように存命中に活躍した作家であるにもかかわらず、現在沖永良部でも一色を知る人は多くなく、文学史においても顧みられることがほとんどない。発表者は、一色次郎の研究を推進し再評価の機運を高めていきたいと考えている。

まず、これまでの一色をめぐる言説が、結核を患った母との交流をテーマとした「青幻記」、および父の冤罪と死を扱った「太陽と鎖」（1964 年）に集中しており、一色文学が「青幻記」以前 - 以後という区分で一般に認識されていることを指摘する。つぎに発表者は総体的に一色文学を捉えるため、新たなより詳しい時代区分を提唱する。①出発点としての、19-20 歳にかけて出版した二点の創作集②「青幻記」受賞以前の少年少女向け偉人伝記・冒険小説③②と同時期に文芸誌に執筆した純文学作品④「青幻記」⑤「青幻記」以降、「魔性」（1979 年）など自ら参加した死刑廃止運動と関わる作品。

加えて、沖永良部島での調査を含む、一色の

(8) 島嶼研だより No. 86

一次資料調査の成果について紹介をしたい。



鈴木優作氏

第 232 回 2023 年 9 月 25 日
奄美の海に暮らすヤドカリとその共生者に関する研究

吉川晟弘
(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
奄美分室)

本発表では、ヤドカリとその共生者の適応進化に関する知見を紹介する。ヤドカリと聞くと、オカヤドカリのような「陸に暮らすヤドカリ」を思い浮かべる人も多いだろう。しかし、陸上で暮らしているヤドカリはごく少数であり、ほとんどのヤドカリは海の中で暮らしている。これまで演者は、潮間帯を含む浅い海と水深 200m よりも深い深海と呼ばれる海に暮らすヤドカリ、およびその共生者についての系統分類学や行動学的な研究を行ってきた。本発表で演者がこれまで行なってきた研究の成果、特に奄美群島を含む日本近海に生息する種についての知見を紹介することで、多くの人に「海に暮らすヤドカリ」の存在を広めたい。

ヤドカリのほとんどは、巻貝の貝殻を「家」として使う。しかし、その貝殻は既に死んでおり大きくならないため、ヤドカリは成長するためにはさらに大きな貝殻に引っ越さなければならない。特に海に暮らすヤドカリが使う貝殻には、イソギンチャク類や巻貝類などの複数の共生者が暮らしている。これら共生者はヤドカリが引っ越しを行うたびに関係が切れてしまうため、共生を続けることに特化した形態や行動を進化させている。本発表で演者がこれまで明らかにしてきたヤドカリと、その共生者の

「貝殻を舞台とした適応進化」を紹介することで、「海に暮らすヤドカリ」を研究することの面白さを共有する。



吉川晟弘氏

特別研究会 2023 年 4 月 10 日
1) マルタの幸福度を測る

マリー・ブリグリオ
(マルタ大学)

この発表では、幸福と幸福度に関する最新技術の概要を説明する。そして、幸福度に関する 3 つの問題について考えていく。(1) 幸福度はどのように測るのか (2) 幸福度を高めるものは何か (3) 政府、企業、個人にとってどのような意味を持つのか。さらに、地中海の島国であるマルタの幸福に焦点を当てます。他の国（地中海、ヨーロッパ、世界）と比較したマルタの幸福度の状態や、生活の質に関する課題についての最新情報を共有する。最後に、単なる経済成長ではなく、幸福度を追求するための各国の取り組みについて紹介します。



マリー・ブリグリオ氏

2) 地中海地域における気候変動の影響と気
候変動に強い地域づくりについて

ステファノ・モンカダ
(マルタ大学)

この発表では、地中海地域における気候変動の影響について、沿岸地域と島嶼部に焦点を当て、さまざまな知識を統合し、気候変動の影響に対応できる持続可能な開発の道筋を明らかにする。地中海沿岸の人口の3分の1(約1億5千万人)は海の近くに住んでおり、海のすぐそばで開発された基幹施設に依存している。地中海沿岸地域の40%以上は、建築物やその他の方法で改修工事が施されており、海面上昇と異常気象の組み合わせによって引き起こされる沿岸の洪水や浸食に対して特に脆弱である。さらに、沿岸の帯水層への海水の浸入(海水侵入)や沿岸の生息地の劣化にも脆弱であり、人間や経済活動の集中により、沿岸生態系の劣化が進んでいる。この発表では公平で持続可能な地域づくりのために、沿岸域管理における新たな問題やさまざまな社会経済グループのリスクへ対処するための情報を紹介する。



ステファノ・モンカダ氏

特別研究会

2023年4月19日

スポットライトの下で：世界の中心にある

島々

ゴドフリー・バルダッキーノ
(マルタ大学)

学問分野には、独自の雑誌、ハンドブック、協会、会議、学位プログラム、推薦図書が必要である。「島嶼学」は、現在、これらすべてを備えている。島嶼学には独自の「研究方法の入門書」も用意されている。それには(特に小さな)島や島民について、島民のために、島民とともに研究を行う際の特別な課題を説明している。この入門書は島の条件である「島性」に注目している。これは、それ自体では何も引き起こさないが、行動やシステムを特定の方法と方向に誘導することができる。したがって、小さな島のシステムでは、経済的独占、社会的親密さ、政治的全体性といった性質が、より大きな本土では通常見られない、独特の「小ささの生態系」を構築している。

本発表では、人類学者マーガレット・ミードの先駆的な著書『サモアの思春期』(1928年)からまもなく100年を迎えるにあたり、「島嶼学」の進化の一端を紹介する。特に、島が、退屈で忘れられた周辺地域でありエキゾチックな研究対象から、人新世の中心的かつ象徴的な存在に、そして1945年以降の国際世界秩序の国際関係における主体へと変化していく過程をたどっていく。



ゴドフリー・バルダッキーノ氏